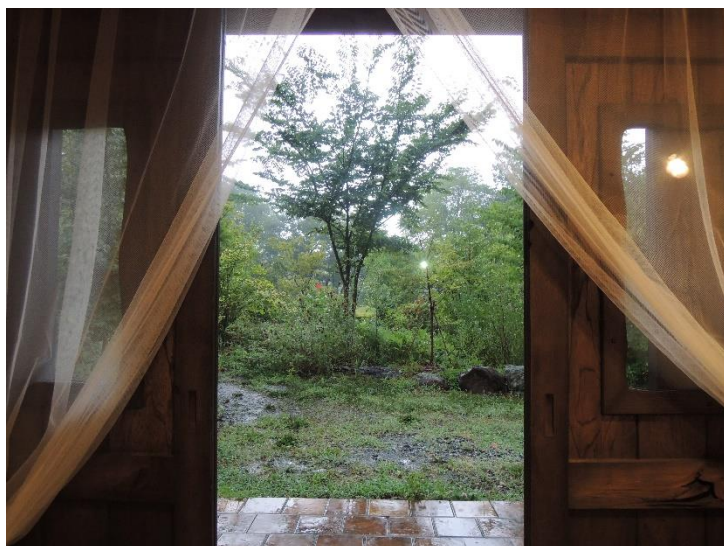


声に出したい雨の比喩

牧師 山本 護



草刈りの途中、雷が鳴り、ひやっと風が吹いて、おっタ立だ。からから天気が続いたので木々や草花が喜んでいるわい、とホッとした心持ちで大きく息をしました。次にハッとして、あれ、どのくらい経ったのか。…随分長く、雨を見ていたようです。

よく知られた「巷に雨の降るごとく われの心に涙ふる かくも心ににじみ入る この悲しみは何やらん(P.ヴェルレーヌ

／堀口大學訳)」。大正期の翻訳詩は、仏蘭西モノでも独逸モノでも、醤油で味つけされたような七五調。また旧約詩篇の恵みの雨も、文語訳だと「苺りとれる牧にふる雨のごとく地をうるほす白雨(むらさめ)のごとくのぞまん(詩編 72:6)」と高踏的、声に出して唱えやすい調子になります。

雨は「～のごとく」と比喩になりやすいようです。流行歌では「雨が小粒の真珠なら恋はピンクのバラの花(雨の中の二人)」と無関係な比喩を組み合わせ、あたかもシュールレアリスム「解剖台の上のミシンとこうもり傘(ロートレアモン)」のよう。ちなみにこの歌、橋幸夫の快晴声の合間で、ヴァイオリンがキュキュッと粹に雨を描写しています。

驟雨になり、草刈り機を片づけ、集会所でぼんやり雨を見てみると、「巷に雨の降るごとく」や「雨が小粒の真珠なら」が鼻歌のように口をついて出ました。そんな自分の声に苦笑し、もう一度大きく息をすると、雨に濡れた庭が何か意味ありげな光景になっています。音として現れる言葉は視覚をも刺激するのでしょうか。

「なんぢの聖言はわがあしの燈火わが路のひかりなり(詩篇 119:105)、われ詰朝(あさまだき)おきいでて呼はれり、われ聖言によりて望をいだけり(119:147)」。聖言には「みことば」というルビ。聖書の御言葉は、黙読するだけでなく、ふいに口をついて出るようなものでありたい。声として折々に発せられたなら、いっそう身近に我が足の燈火となり、我が路の光となり、望みとなるだろうに。でも大正期の詩篇は、今や遠景になってしまっています。

しばらく雨を見ていました。「苺りとれる牧にふる雨のごとく 地をうるほす白雨のごとく(72:6)」という音声の重厚さには憧れますが、「雨が小粒の真珠なら」というペラッとした比喩でも、思いのほか心は動かされました。Ω